

日本人の皆様へ

今、知らせたいこと

今こそ日本人は、西暦199年に、原始キリスト教を、続く景教を純粹に信じた私たちの祖先がいたように、何の混じり気もない純粹な教え・真実の神の教え・福音(グッドニュース)にもう一度立ち返らなければなりません。すべての名にまさる名は、イエス・キリストただお一人です。この方を自分の主(神)だと告白し、愛し、従う、神に召された者たちが、この日本にまだまだいると信じます。2000年前の最初のイエス・キリストの教え、真の神がいる事、神は愛であるという事を、この時代を生きる日本人に伝えたい!その思いで、私たちはこの冊子を作りました。

これは、万物の創造主である父なる神と、その神が、2000年前に人類に遣わした御子なる神イエス・キリストからの呼びかけです。何ものにも代えられない神の偉大な愛と、真実の神の教えが、読んで下さった皆様に届く事を祈ります。

本文〈おわりに〉より抜粋



<この冊子を読まれる方に>

聖書は、この世界において本の王様であり、年間5億冊以上売れている本です。1980年～1990年には、年間7億冊以上売れました。1989年にベルリンの壁が崩壊し、東ヨーロッパの共産圏の国々が倒れて信教の自由を得た人々が、真実を知る事に飢え渴いて聖書を求めたからです。

人類と世界の歴史書であり、人類の行く末について前もって書かれた預言書でもある聖書は、人間の意見をまとめた本ではありません。全てが神の言として私たち人間に与えられたものです。そして、この神は、人“が”作った神(26万6千あると言われる)ではありません。聖書の神は、人“を”造った神、時間やエネルギー、物理法則をつくった神なのです。

たとえば、旧約聖書のエゼキエル書は、2600年前に預言者エゼキエルによって書かれました。エゼキエル書38章には、世の終わりに、ロシア、トルコ、イランがイスラエルを攻めるが、地球規模の大災害が起り、イスラエルが勝利するという預言が書かれています。

神という存在は、信じる人にとって存在しており、信じない人にとっては関係ない、存在しないものなのでしょうか？日本最古の歴史書である古事記は、約1300年前に完成しましたが、その2倍である2600年も前に、近未来の事が明確に記されているのです！聖書の預言は、人が信じようが信じまいが、全て着実に成就してきました。その事によって、聖書の神こそが眞の神であることを実感せんにはおれません。

そんな聖書にはっきりと書かれているのが、墮天使ルシファー・サタンの存在です。2600年よりもさらに前に遡ると、天での戦いがあった事を、聖書は教えてくれています。

ルシファーは、もともと贊美の働き人として神様に仕えていた一人の天使でした。しかし、神様より偉くなろうとして高ぶった為、地上に落とされたのです。そして、神様はこの墮天使ルシファーのために地獄を用意しました。

墮天使ルシファーは、「サタン」と呼ばれるようになり、地獄に行くその日まで、人間が住む地上の世界の神になりました。(聖書ではサタンを龍や蛇であらわしています。日本人が挙げる龍神や、神の使いと言われ幸運・金運を来たらす蛇は、まさにサタン＝悪魔そのものです。)

イザヤ書14：12～15

【黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる。】

ヨハネの黙示録12：7～9

【さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦つたのである。龍もその使たちも応戦したが、勝てなかつた。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなつた。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす

年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。】

その後、神様は自分に似せて人間を造りました。神様は人間をとても愛していたので、サタンはそんな人間を妬ましく思い、人間も共に地獄に道連れにするために、この世に誕生した瞬間から、家庭教育や学校教育、あらゆる環境、人、媒体(書物、テレビ、インターネットなど)をつかって自分の支配下に入れていました。さらに、無数の悪霊を引き連れて人間をそそのかし、神様が望んでいない事をさせるようになりました。こうして、神より偉くなろうとする高ぶりのパン種＝ルシファーのパン種が、全ての人間の中に入れられていきました。そして、人間は勝手気ままに宗教＝神を作り出し、本当の神が見えなくなったのです。

《注：聖書について

書店で購入できる全世界共通の旧約・新約聖書の事です。新興宗教であるエホバの証人なども、聖書という言葉を用いていますが、本物ではなく各宗教団体が作り上げた偽りの本です。》

<はじめに>

【すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。】（マタイによる福音書11章28節）

これは神様からのラブレターと言われ、世界中の国の言語に訳されている「聖書」という本の中にある言葉です。多くのプロテstant教会の入口に掲げられている言葉ですので、一度は目にした事があるかもしれません。

この言葉は、人間は誰でも、いつでも現実問題という重荷を負っていると教えていました。「大したことないよ！」と言ってはいても、実際はずっと抱えている苦しみや悲しみ、体の痛みもあるでしょう。それはどれだけ周りが負ってあげたくても、代わってあげることのできない個人的な重荷です。さらに、実は私たち人間には、誰にでも生まれた時から背負わされている3つの重荷があります。

① 生きるという重荷

誰一人として望んでもいなかったのに、この世の中に生まれてきた宿命。人生は幸せなことばかりではありません。突然、“なぜ？！こんなはずではなかった”という出来事が起こります。事故や災害、大病もいつ我が身に起きるか誰にも分かりません。1秒先の事が分からない世界の中で、命がある限り、たとえどんなに無目的で、虚無的な生活になろうと生きなければならぬのです。

② 罪という重荷

生まれつきの皮膚の色、容姿、性別、家柄など、変えることのでき

ない条件をもって生きていく中で、人と自分を比較して妬んだり憎んだり、不平不満や悪口を言ったり、うそをついたり、だましたりしながらどんどん悪（神様の目からみた罪）を重ねる宿命。その罪の奴隸状態が、心身の不調・病を来たらし、永遠の滅び（地獄）に繋がります。

③ 死の重荷

どのような人生を歩んだとしても、結局は皆死んでいくという宿命。聖書には裸で生まれ、裸で死んでいくと書かれていますが、いつかは必ず何も持て行くことができずに、死なければならないという孤独と恐怖を抱えています。

私たち日本人は、現実問題やぬぐえない悲しみや痛みからなんとか解放されたい時、宗教や哲学、果ては占い師など誰かの助言を求めて生きてきました。宗教や哲学、自分なりの信心は、一時しのぎの気休め、心の拠り所にはなるでしょう。しかし、それらは全人類が共通に抱えているこれらの3つの重荷を降ろさせることはできません。今まで、特に私たち日本人が信じてきた、人の手が作り出す木や石の偶像（仏像、地蔵、位牌）やお守り（数珠）、人の経験に基づく人生観や世界観という哲学、いわゆる先祖伝來の言い伝えや、誰かの悟りや宗教といわれるものは、人間を真に救い出すことはできないのです。

では、誰のもとに行ったら、この重荷を降ろして休むことができるのでしょうか？

聖書の中で【重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい】と言っているわたしとは、唯一の神、人間一人一人を

母の胎内で大切に組立て、各人の髪の毛の数までご存じの神です。この方こそ本当の神様であり、

①永遠無窮の神…永遠に存在する

②不变なる神…どんなことがあっても変わらない

③聖なる神…微塵の汚れも許されないきよい神

④全知全能の神…全てを知っており、不可能なことはない

⑤愛なる神…あなたを創造し、この世に誕生させ、誰よりも
あなたを知り、愛しておられる神

⑥義なる神…不正を憎み、不義をこらしめ、悪を裁く
といわれる方です。

その方のもとに行って初めて、人間はこの3つの重荷を降ろすことができるのです。そして、正真正銘のこの神は、ご自身の一人子であるイエス・キリストを信じる者は、救われると教えて下さっています。イエス・キリストによって、初めて、やっと、全ての重荷は取り除かれるのです。

生まれてきた意味を教え、全ての罪から解放し、死んでも生きる永遠の命を与えて下さる神がいるにも関わらず、なぜ、私たち日本人はその神に目を向けることが出来ずにきたのでしょうか？

<日本人が信じている神とは?>

日本人が信じている「神道」の神とは、何でしょう？考えたことがありますか？

日本人は、八百万の神々がいると信じ、山の神、海の神、その土地の神（氏神）など、ありとあらゆるものに「神」という名をつけ拝んできました。特に、皇室の祖神であり、太陽を神格化した神である天照大御神は、神々が生活する天上界の最高責任者といわれ、各地の神社に祀られています。さらに、死んだ人間を神様としたり、キツネや蛇、龍といった動物を祀っている神社もあります。日本人は、神は神社（小さなほこら）の中におり、お賽錢を投げたら祈りを聞いてくれると思っています。また、自然災害や自分の身に不幸が起ると、神を怒らせてバチが当たったと思います。このように、天照大御神を中心とした神話の神、八百万の神々、死人や動物、自然や自然現象などに基づく教え（伝説）を尊ぶ信仰、日本特有の宗教を「神道」と言います。

日本古来の宗教であるその「神道」の教えが、第2次世界大戦時には、天照大御神の末裔であるとされる天皇陛下を神格化させました。そして、人々に「神風が吹く！」と言って、敵国アメリカに対して戦いを挑ませたのです。それによって、たくさんの国民が「天皇陛下、万歳！」と言って死んでいきました。神道の行き着いた先は、一人の人間を国の神として教え、崇めさせる天皇偶像礼拝の国家だったのです。眞の神は、人間一人一人を平等に造られたのにも関わらず、天皇のために、お國のためにと命を捧げた人々=日本人が生まれてしまったのです。過去に（まだ、70数年前の出来事です）、日本国民

全員を政府が国家神道へと誘導し、有無を言わさず国民を洗脳して、命を捧げさせたこの事実をどう考えるでしょうか？

国をあげての世界大戦への出陣・敗北の原因である国家神道について、神道は宗教であるのに‘個人の信仰’をないがしろにした事を深く考えもせずに、70数年が経ちました。しかし、世界の国々から見たら、日本とは、世の中を震撼させたオウム真理教同様に、カルト的な宗教国家だったと言えます。それにも懲りずに、今の時代も天皇を国の象徴として崇拜させ、皇室をかつぎあげ、日本特有の伝統文化を大切にする事をかけて、国民を一つにしようとしている「日本会議」という組織が発足しています。この組織は、「美しい日本の伝統、日本人の心を取り戻す元気な日本誇りある日本」をうたい文句にしています。「日本会議」は、政治に神社本庁が協力して、自分の国は自分で守ると、敗戦憲法改正を目指しています。

ここで、自分の国は自分で守る憲法改正の善し悪しを論じる思いはありません。ただ、要注意なのは、政府と神道と天皇陛下(皇室)を土台に、またもや日本國の日本人の行く末を決定することは、同じ過ちを繰り返す事になります。聖書には、「悪魔の策略」と書いてあります。

日本人の心、誇りとは何でしょう？本当に美しいものだったのでしょうか？自画自賛ではないでしょうか？

小さな島国で生きる私たち日本人は、先進国と言われながらも、その神觀に対しても、まだ「井の中の蛙大海を知らず」で、聖書の唯一神を知らず、聖書の教えを理解できずに生きてきた…それは、地球上の先進国で日本人だけと言っても過言では

ありません。

なぜなら、日本という国には、聖書(唯一神の存在と神の言葉を教える書)というものを疎んじてきた歴史があるからです。

神道を信仰してきた日本人。しかし、その信仰の土台に目を向けると、曖昧な神觀が見えてきます。

神社で手を合わせている人、神社の祭りでみこしをかついでいる人々に、「この神社は誰を祀っているのですか？」と尋ねたら、どれだけの人が答えられるのでしょうか？どんな神なのか、どんな人間が祀られているのかも分からぬのに、拝んでいる人が大勢います。危険な儀式を行う祭りでは負傷者や、命を落とす人もいます。現在では、祭りそのものが、酒を飲んで仲間と騒ぐ親睦の機会と思って参加している人もいるでしょう。

「キツネと人間、どちらが偉い？」と子どもたちに質問すれば、ほとんどの子どもが「人間に決まっているじゃないか！」と答えますが、動物であるキツネが稻荷という神として祀られると、何の疑いも持たずに、大人たちがキツネを拝んでいます。聖書によれば、蛇や龍は悪霊の象徴であり、神に逆らったが故に地上に落とされた訳ですが、日本では運気が上がる、縁起物と言われ、龍神様に愛される事や、好かれてつながりを求める人がいます。日本人は、真反対の感覚を持っているのです。

また、どんな神社なのかよく分からなくても、安産祈願、合格祈願など願いを叶えたければ絵馬を書いて祈願し、お守りを買います。人にプレゼントまでします。おみくじを引きにお参りに行き、家を建てる時には必ず地鎮祭を行い、お宮参り、七五三、

はたまた不幸が続く時にはお祓いに行く人達…個人的に質問すると無宗教と答える日本人が多いですが、^{はつもうで}初詣の習慣は、世界から見て最大級の宗教行事と言われています。イスラム教最大の宗教行事であるメッカの大巡礼に集まる信者の数は約200万人ですが、正月三が日に明治神宮を参拝する人は約320万人にものぼり、実に1.5倍です。約9000万人の人が日本全国で初詣をしているそうです。

ならば、日本の宗教は、「神道」なのかと思いますが、日本人は、「仏教」も信仰してきました。

仏教の僧侶からキリスト教の牧師(クリスチャン)になった方たちは、「仏教の教えは、^{しゃか}釈迦という一人の人間が悟った教えて、阿弥陀の本願は、人々を救う方便(仮にとる便宜的な手段)でしかない。仏教とは本来、苦と人生を縛ったものから解放する人間哲学であり、命のない物を拝む偶像崇拜である」と言っています。しかし、日本人には仏教が人間哲学であるという知識はありません。日本人には「神道」と「仏教」の2つの宗教が混在しています。正確に言えば、仏教を信仰している人はほとんどおらず、ただ、仏壇が家にあり、仏式で葬式をあげ、決まり事として当然のように法事をしているだけです。神仏行事には先祖代々のしきたりに従って行う事が当たり前だという感覚で、先祖への感謝の思いだけを持って仕えています。先祖への感謝の気持ちは大事なことですが、それがいつの間にか、仏壇や墓の中にいる先祖(故人)に向かって願い事を言うようになり、神にしてしまっているのが日本人です。

信者が日本の法の下に死刑となったオウム真理教という教団

の教祖の思想も、「仏教」から来ています。「我こそが仏教の最高峰に立つ解脱者だ！悟りを開いた者だ！」と言って、現実社会に苦しみ、また疑問視する未来ある若者たちを教え導き、そして狂わせ、死刑に至らせたのです。彼らは、「これ以上罪を犯さないように人を殺してあげることが救済だ！自分たちの国をつくろう！」と言った一人の人間の哲学に洗脳されて、たくさんの人々の命を奪ったのです。「既成の仏教が心の拠り所にしかなれず、僧侶に救済能力がない故にこのようなことが起きた」と、苦しみ悩んだ日本の佛教界、僧侶たちがいたと聞きました。

日本人は、聖書の教える靈の世界に対して正しい理解がない故に、神道(祈願・お祓い)や仏教、新興宗教だけでなく、スピリチュアルと言われる悪靈により人間をだます現象に対しても、ただ‘不思議’と思われる事が伴えば、何の疑問もなく困った時に再びそこに頼っていきます。それしか知らないで来たからです。そうやって、「悪魔の策略」により、繋がりを強められていくのです。一度、不思議体験すれば、それが自分にとって心地良いことであろうと、気味の悪いことであろうと、その不思議が何を意味するのか、判断する知識もない訳です。ただ、先祖代々受け継がれてきたやり方であり、それが日本の伝統だからという事でやめることはできず、当たり前のように行い続けています。聖書には、【わたしの民は知識がないために滅ぼされる。】(ホセア書4章6節)と書かれてあります。

そして、「聖書」と聞くだけで反発したり抵抗を示す人が多い国でありながら、イエス・キリストの生誕を祝うクリスマスや、

十字架上での死から3日目に復活された事を祝うイースターを、知識もないまま特別な日としています。バレンタインやハロウィンも、何でも商業ベースにのせられている日本人ですが、真実(起源)を理解している人がどれだけいるでしょうか？特に、ハロウィンは、絶対に関わってはならない悪霊の呪いを我が身に来たらせる祭りです。速やかにやめるべきです。

女性たちはウエディングドレスを着たいがために、教会でイエス・キリストの前で誓う結婚式を選びます。式を執り行うのは、ほとんどが本物の牧師ではないことを知らずに…聖書を信じる(イエス・キリストを信仰する)信徒ではないのですから、当然の事です。そして、キリストとは「救い主」という意味ですが、実際救われてキリストの前で夫婦になる事を誓い、クリスチヤンになる人はおらず、自身が誓った神を忘れて(最初から何も分かっておらず)、聖書の話を聞いても「私は仏教だ」と言い、「離婚はしてはいけない」と書かれている聖書・キリストの教えに背いて、離婚をしている夫婦も大勢います。

結婚式はキリスト教式で行ない、子供が生まれたら神社へお参りに行き、心の願いを祈り(神道)、葬式は仏教式、さらに、名前を考えたり、印鑑をつくる時には占いやお告げ（カルト・スピリチュアルの世界＝悪霊の働き）が関わり…日本の宗教文化は、「重層信仰・混合宗教」と言われていますが、何でもありの日本人の神への姿勢・神との関係、その‘無知’に世界は驚きます。

このように、日本では独自の神々が次々と発明され、またその神々が時代に合わせて変化してきました。それに伴って、信じる宗教を何度も変える人たちもいます。それはなぜでしょう？日本

の神々と言われるものが、私たちに真の満足を与えてくれないからではないでしょうか？どれだけ信じ、従事しても、不幸は続き、平安がなく満たされません。なぜ！？と感じ、神に対して文句を言いたいのに、皆もそうだからと自分をなぐさめ、神に祈ったからと言って報われないこともあるのだと思い込まれてきました。結果的に、「教祖」と呼ばれる人間の知恵によって、それぞれの神々・宗教の良い部分、受け入れられる部分だけを合体させた新興宗教が続々と生まれ、あげく「神などいない！信じない！神や宗教を信じるのは弱い人間だ！」と言って無神論者に至った日本人も多いのです。無神論者は、結局は自分を信じ、他者が経験によって培った事の中から、自分の益になるものだけを取り込み、自分が“神”になる…そういう人間を、聖書は、自分偶像礼拝者と教えます。しかし、自分で自分を救うことはできず、明日の命も分からぬ…所詮、眞の神を認めぬのでは、悪霊に翻弄され、何も持てずに(何の保障もなく)素っ裸で死ぬしかない無防備な人間でしかありません。

この国で生まれ育った人は、「自分にとって都合の良い神であれば、何でもいい。願いさえ聞いてくれればいい」と考えている人の方が多く、確固たる信仰をもって、一つの神(教え)を信じている人の事を「宗教をしている人」と呼び、特別視します。家族がそのように変わると、「洗脳されている」「深入りするな」と警戒します。

教祖がいるような宗教や、占い師・霊媒師にのめり込んでいくこと(金銭授受が伴う)はオカルト宗教で危険です。しかし、なぜ！？という疑問に必ず答え、いつも平安で健やかである

ようと、あなたを絶えず思って下さっている神は確かに存在します。欧米諸国が信じてきたのは、天地と人間を創造された神、お一人です。そんな唯一の神、聖書が教える神を知り、神の長子であるイエス・キリストを受け入れたクリスチヤンと呼ばれる人の信仰は、日本人の神観とは全く違います。

日本人は、真の神を知りません。しかし、よくよく世界を見てみると、全く違う観念で神と向き合っている人々がいます。世界中で聖書の神を信じているのは7人に4人と言われるほど最も信者数が多いのです。先に述べた「悪魔の策略」を明解に聖書から伝えるなら、日本人は、唯一の神のようになろうとして高ぶった墮天使・サタン(悪魔)がつくった神々と、その教えである宗教にだまされてきたのです。それらは、全て日本人を真の神から離し、落胆、失望へと導くサタンの自作自演の世界であり、日本人は偽の神々を信じるよう洗脳されてきたのです。

その中でも特に、日本人の多くが騙されてきた仏教、“仏教制度”について、ここからはお伝えしたいと思います。これもまた、約400年前の江戸時代、キリスト教（カトリック）の支配を恐れた徳川家康が、キリスト教を弾圧するために寺と結託してつくった制度でした。僧侶と手を組んだ家康は、自分の支配下に国民を入れるために檀家制度をつくり、寺の支配下に置かれた国民は、その制度を今日に至るまで当たり前のように守り続けてきました。神棚もあれば、仏壇もある…日本の家庭は、お金をかけて目に見える形で儀式的に神（実は偶像）を祀っていますが、自分の髪の毛の数まで知り、万物をつくり世界を支配されている目に見えない唯一の神によって生かされている事を知らずにきたのです。

＜日本人がだまされていること…仏教で葬式＞

人間・あなたを造られた神様だけが、あなたを真に愛して下さっています。いつもその心に深くあなたのことを思って下さっています。あなたが、今まで病気や様々な問題に苦しんでいたのは、その神様に出会わずにきたからです。人間がつくり出した神々や、死んだ瞬間神（仏）になった人間、ましてやキツネや蛇、龍などの動物に、人間の病気を癒したり、貧困、わざら恐れ、煩いという苦しみから救い出す力はありません。真に問題を解決することもできません。

人間を造られた神様こそ本物であり、その方のもとに行つた時に初めて、病気や煩い、現実問題を受け付ける必要のない、平安な人生を送ることができるのです。天と地、この世に存在しているありとあらゆる物を造った神様は、人間に住まい（寺、神社、ほこら、仏壇、神棚）や、食物（供え物）を要求されたり、祈りを聞く代わりにいちいち金銭（お賽銭）を欲しがったりはしません。神様が人間に養われる必要があるでしょうか？一人一人の人間を愛し創造し、誕生させたのに、バチを与えたり、死人をつかって祟りを与えたる、金額が少なかったら御利益も少なくするでしょうか？人間を造られた神様は、奪う神ではなく与える神です。私たちの頭脳も造られた神様は、人間の想像をはるかに越えた偉大なお方なのです！

使徒行伝17章24節～28節

【この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えられる

必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて搜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりひとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。】

神様の激しい燃えるような願い、それは、あなたが最高に幸福になることです。その証拠に、毎年世界のベストセラーである聖書には、【愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている。】(ヨハネの第3の手紙2節)と書かれています。私たち日本人は、この神様見えなくさせられてきたのです。

その原因の一つとして、日本の仏教制度があります。

日本人は死んだら大抵、仏式のお葬式をあげます。しかし、どれだけの人がその意味を知っているのでしょうか？

日本において仏教の僧侶による葬式が一般民衆に制度として広まったのは、1603年に江戸幕府になってからです。仏教で葬式することは家康が天下を平定した江戸時代で、ここから仏教が幕府によって保護されることになります。幕府がキリスト教を禁止し、民衆を支配するために檀家制度を作り、民衆はそれぞの宗派に組み込まれました。そして寺が発行する、檀徒であるという証明書がなければ旅行も就職もできず、実際、生活はできませんでした。このようにして、僧侶の

権力は大きくなっていました。

幕府の命令で僧侶が葬式を行うようになり、僧侶には死人が自分の檀徒かを確認し、戒名を授けることを義務付けられました。もし葬式に僧侶を呼ばなければキリストンの疑いをかけられ、死刑にされることがありました。それ以前の葬式は、主として村の長老が行っていました。ただし、貴族と武士は鎌倉時代、室町時代から僧侶が行っていました。

今も昔も権力同士の癒着。そこに動くものは、お金です！葬式代、戒名代、墓代、法事代、永代供養…お金つながりの持ちつ持たれつの仏教社会の人間関係…聖書に書かれているとおり、日本という国は、神よりもお金、地獄の沙汰も金次第、神の前に高ぶって地上に落とされた墮天使・この世を支配する神サタン(悪魔)の思うつぼです。一人の人間の死を悼むよりも、特に葬儀においては亡くなったと同時に葬儀屋と寺(僧侶)が動き、息つく暇もなくサタンが巧みに敷いたレールの上に乗せられてしまうのです。

一体何のために、誰のために私たちはこの儀式を続けているのでしょうか？「人がしているから」「人と同じなら安心」と考え、異議をとなえたら他人にどう思われるかを心配し、なんとなく右へならえ！で生きている人が多すぎるのではないか？それとも、このやり方以外にない国だから、疑問に思わなかつたのかもしれません。「私の家は仏教です」と言う人は、どれだけ仏教のことを分かっているのでしょうか？

仏壇も戒名も法事も、所詮数百年前の人間、徳川家康が、自ら

の利得の為に考え出した悪政策の遺物です。亡くなった人間がいきなり成仏(仏に成る?)という事も、作り話にすぎません。江戸時代より前の人間はどうなるのでしょうか?

私たちは当たり前のように仏式で葬儀をし、先祖の罰が当たらないように、祟りのないように、たくさんのお金と時間をして供養していますが、はっきり言って仏式は今も尚、寺(僧侶)の優位・保護の為でしかありません。「坊主丸儲け!」という言葉も聞かれます。実は皆が心の底で、長年思い続けてきた“^{ほんね}本音”ではありませんか?しかし、皆が“^{たてまえ}建前”で生きているから、この国だけは井の中の蛙のまま何も変わらないのです。インターネットの普及で格安のお坊さんを派遣してもらえる時代にもなりましたが、お坊さんが必要でしょうか?そこに成仏への信仰が本当にあるのでしょうか?

当たり前だと思って行なっている火葬についても考えてみてください。

日本は700年頃まで土葬でしたが、それ以降火葬が始まりました。日本人が当たり前のようにしてきた火葬という埋葬方法は、何を残すことになったのでしょうか?

日本人は火葬された人の骨を拾い骨壺に入れます。その骨壺を置いておくためにも祭壇(仏壇)や墓が必要であり、代々守っていかなければなりません。さらに葬式で位牌に故人の魂を込めるという儀式をするため、その位牌が故人そのものと教えられ、毎日ご飯や水を供えて拝みます。(災害時に、位牌を取りに戻って逃げ遅れ、命を落としてしまう人もいるほどです。)そして、その後も長年に渡り、供養のためと称し僧侶が来訪、その都度、暗黙の了解でお金を支払います。仏教界

のビジネスシステムです。

欧米や隣国の韓国は、土葬、もしくは火葬であっても骨は遺さず灰にします。しかし、日本ではわざわざ骨を拾わされるのです。そして、位牌を与えられます。大事な人、愛する人が火葬される時が一番悲しく辛いと言う人がいます。骨を拾うことのできる日本人の魂は死んでしまっているのかと言われるほど、他国の人人が驚くような奇妙なことを当たり前だと思って行なってきました。

クリスチヤン(キリスト教)であれば、聖書に【ちり(体)は、もとのように土に帰り、靈はこれを授けた神に帰る。】(伝道の書12章7節)と書かれてあるように、故人は天国に帰り、自分達もいざれまた神がおられる天国で会えるという信仰があるため、故人の亡骸に執着しません。灰になった骨はちりにすぎず、土に帰るのが自然ですから、土葬、もしくは灰になるまで火葬するのです。戒名(法名)もなく、聖書は、「イエス・キリストを信じた者は、神の前に憶えられ、命の書に名前が書き記されている。信じない者も、天のその他の書物に名前が記されている。地上で名を残すのではなく、天にある命の書に名を記されるとなりなさい」と教えてています。

しかし、日本においては、法律で決まってはいないものの、土葬の場合の場所の確保や衛生面などを理由に、制限をかけている自治体もあり、骨を遺す仏式火葬方法を選択するしかない流れにもっていかれ、クリスチヤンであってもそれに従わざるを得ないのが現状です。

骨を遺すので、それをどうするのかと考えます。今は散骨する人も増えましたが、代々受け継がれてきた墓と仏壇がある故、

それを守る義務を負っている人、特に女性たちが大勢います。処分したら罰が当たると考える人も多いでしょう。ですから、日本人は聖書の教え(福音)を聞いても「お墓はどうするの？仏壇は？親戚になんて言えばいいの？」と考えてしまいます。そして、揉め事を起こして“キリスト教に改宗する”くらいなら、今の方が多いと思ってしまい、あえてその世界に飛び込む事を選ばない、あるいは家族や親戚の目を気にして選べないという人もいます。日本の火葬制度がもたらす弊害は大きいです。骨を遺すという火葬方法と、故人にかえて渡される位牌の存在が、後々に至るまでたくさんのお金を支払って、供養という名の儀式を続け、墓と仏壇を“守っていかなければならない”的です。

キリスト教式の葬儀はお金もかかりません。葬儀後の初七日、四十九日、〇回忌というような行事に追われることもあります。神観、死生観が正されるだけで、どれだけの精神的重荷・経済負担がなくなるでしょう。

特に死生観において、仏教で当たり前のように教える「輪廻転生」は全くあり得ません。死んで、あの世で会えるはずの人がどこかに生まれ変わっていて不在でしょうか？生まれ変わつてのだとすれば、故人のために一生懸命、永代供養をし、いつまでも仏壇の位牌を拝んでいる事も、矛盾が生じてきます。神が愛してご自身の似姿に造られた人間、私たちはこの世でたった一人だけです。前世も後世もない、一人一人が神に愛された神の作品です。人間は神によって母の胎内で組み立てられ、最善の一生を送るべく青写真(神による至福の計画)を持って、この世に誕生するのです。

詩篇139篇13節～16節

【あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました。……中略……わたしが隠れた所で造られ、地の深い所でつづり合わされたとき、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかつたとき、その日はことごとくあなたの書にしるされた。】

そして、人間は死んだら天国か地獄、どちらかに行くと定められています。先祖の待つあの世も極楽も、三途の川も輪廻転生もありません。聖書では『むなしいだましごとの哲学』、人間の作り話なのです。真の神のもとに帰る天国か、サタン(悪魔)の待つ地獄へ行くのか、最後の審判が待っているのです！

ヘブル人への手紙9章27節

【そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっている…】

ヨハネによる福音書17章3節

【永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。】

ヨハネによる福音書5章24節

【よくよくあなたがたに言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることなく、死から命に移っているのである。】

この世で神のひとり子イエス様を信じて救われ、神が、あなたを母の胎内で組み立てて下さった時に決められた祝福の青写真の通りに生き、神・イエス様の御旨(聖書に書かれてある真理)を行う者だけが、天国に行けます。つまり、眞の神以外の神々に仕え、刻んだ像を造って神として拝んできた日本人は、すでに全く誰も当てはまっていません。

他にも、神が人間に、「人間はこうありなさい！」と記されたモーセの十戒と照らし合わせると、どれだけ神の御前で罪を犯しているのかが分かります。

仏像などの偶像を拝んでいませんか？一週間に一度、安息日を決めて、神の言葉を聞いていますか？父と母を敬っていますか？誰かの悪口を言っていないませんか？悪口は、人殺しの罪に等しいと言われます。^{かんいん}姦淫(婚前交渉・不倫)していませんか？盗みをしていませんか？うそをついていませんか？人のものを欲しがっていませんか？等々、一つでも当てはまれば、地獄行きなのです。

ですから、生きているこの世で、日本人は永遠の命（イエス・キリストに救われ従うこと）、天国行きの切符を獲得しなければならないのです！人間は神の目から見たら、天国か地獄かどちらに行くかを選別されるステージ（＝この世）に立たされています。この世の人生は、70年～80年と聖書に書かれています。肉体を離れてから、靈魂になってからが永遠なのです。

ローマ人への手紙10章9節～11節

【すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で

告白して救われるからである。聖書は「すべて彼を信じる者は、失望に終わることがない」と言っている。】

ヨハネによる福音書14章6節

【わたし（イエス・キリスト）は、道であり、眞理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。】

この世の神と言われるサタンは、仏教を日本人に信じさせて、聖書に書かれてある眞理を見えなくさせ、聞けないようにして、そのような聖書の福音（英語では Good News = 良い知らせ）と神の愛から、人心を遠ざけてきました。サタンが使ってくる武器は、人間の心に忍び込む、占い（きっとこう思われている、こうなるのではないか…）の靈、裁き憎しみの靈、妬みの靈、分派分裂の靈、うそつきの靈などといった無数の悪靈です。特に、金銭を愛する惡根っここの靈、情欲の靈など、この惡の靈力（惡靈）が人間を惑わし、眞の神に対して罪を犯させ、地獄行きを決定させます。仏教の行事の中でこそ、金銭トラブルや、親子間、親戚間でのもめごとを嫌というほど経験してきてはいませんか？これも全て悪靈の仕業です。特に現代に至るまで仏教を使い、サタンは巧みに私たち日本人をだまして来たのです。

救われて、眞の神の守りの中にいなければ、いつ、この世の神であるサタンの策略にかかる、病気や事故、災害などの不幸に巻き込まれるか分かりません。日本人は、不幸があると、今までの人生の中で大なり小なり犯してきた罪によって、“神様のバチが当たったのでは”と思いますが、それは神が与えて

いるのではなく、3代～4代に渡って、真の神を信じてこなかったが故に、バチと思われるサタン(悪霊)の攻撃を受けてきたのです。サタンのすることは、人間をだまし、盗み殺し滅ぼす！これだけです。

釈迦という人が、「ありがたい」と言われる真理の教えを説き、それが日本に伝わってきたと日本人は思ってきました。その釈迦は80歳すぎて肺炎を患い死にました。食中毒、大腸がんでこの世を去ったという説もあります。釈迦も普通の人間、病気で死んだのです。「釈迦は、イエス・キリストより先の時代に生きていた」と言って、ただ仏教の方が古いと新旧の話をする人もいますが、彼は悟りを開いただけで、日本人が信じてきた仏教、行なっている仏教儀式については、後に時代に合わせて考え出されたもので、彼の考えついた事ではありません。

そして、釈迦の生まれたインドでは今や仏教ではなく、牛が神様だと信じています。次に、牛こそが神という教えがインドから伝わってきたら、日本人は牛肉を食べることもやめて信じるのでしょうか？

仏教から救われ、クリスチヤンになった元僧侶たちは、「哲学(仏教)では、どこまで追い求めて神に出会うことはできず、死後の世界も啓示されていないため死後を恐れ、平安のない中で真理を追求していた。しかし、聖書を読んだ時、初めて実体のある真の神を知り、神の子とされたクリスチヤンは、天の父である神の財産をすべて相続するゆえに、祈りを捧げて必要なものは与えられ、平安になり、天国も用意されている事が分かった」と話しています。「僧侶こそ！聖書を読んで頂きたい！」

と、元僧侶たちは、今、声をあげています。

仏像、仏壇、位牌も、細工人がただの木をかたどって作った物にすぎません。私たちは、木でたきぎをして身を温めたり、肉を焼いて食べたりします。鉛筆や机を作ります。その木の一部から、好みに任せて神を造って偶像にし、その前にひれ伏して拝んでいるのです。壊せばもろい木の端くれです。牛を神とするのと同じくらい、愚かな始まりが習慣となり行事となりました。人間がつくりあげた神、仏、神にされた人間…人間が考え出した教えや宗教には、当然、眞実の神に受け入れられるものはみじんもありません。全てがニセモノです。そのようなものを粗末にしたからと言って、祟りも呪いもありません。逆に、魂を込められたといわれる位牌や、仏壇に宿る故人の靈と教えられてきたものの正体は、日本人をだます悪霊です！

イザヤ書4章5節～7節

【あなたがたは、わたしをだれにたぐい、だれと等しくし、だれにくらべ、かつなぞらえようとするのか。彼らは袋からこがねを注ぎ出し、はかりをもって、しろがねをはかり、金細工人を雇って、それを神に造らせ、これにひれ伏して拝む。彼らはこれをもたげて肩に載せ、持って行って、その所に置き、そこに立たせる。これはその所から動くことができない。人がこれに呼ばわっても答えることができない。また彼をその悩みから救うことができない。】

当たり前だと思っていることが、当たり前ではないということ。日本人は単なる江戸時代の悪政策に、今なおだまされ続けて

いるのです。もっと思慮深く、たった一つの真理を見極めることが大切です。神は唯一、そして神に国境はないということ、神は全人類を同じように愛し兄弟姉妹とされ、平等であられます。日本には、日本人だけの特別な神が存在する？その考え方、思い込みの原点は、どこから来ていますか？

仏教に疑問を感じたことはありませんか？おかしいと思ってはいるけど、周りの目を気にして言えずにきてはいませんか？イエス・キリストは、ヨハネによる福音書15章16節で、【あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。】と言っています。あなたは、真の神に選ばれている人ではありませんか？疑問を与えるのも神なのです。神に選ばれた人、神の愛に気づいた人間には、神が聖書で約束して下さった最高に素晴らしい人生が待っています！新約・旧約聖書の「約」とは、神との「契約」の意味です。新約聖書には次のような言葉があります。

マタイによる福音書6章33節～34節

【まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。】

神の国と神の義を求めるとは、イエス様を真の神と信じ、聖書の教えを守り行うことです。仏教も、神道も、宗教（＝悪霊の産物）は、自分が変わることを教えません。自分に利益を与えるために神がおり、神が自分の願いを聞いてくれるという独りよがりの信心です。しかし、聖書は、「あなたがこの地上

で水と霊によって生まれ変わるので！」と教えます。聖書は、神が在っての自分であることを悟って、神の御心に自分自身を従わせ、約2000年前に地上に来られた神の御子イエス・キリストに倣う者となっていくように導きます。それが、「信仰」です。真実の神と人間との正しい関係です。神を信じ、神の言葉を守り行い、どんな時も神を仰ぎ見て生きる人生です。自分が変わること⇒超自然に変えられていくことを嫌がる人は、真理を知ることを避け、宗教（カルト、占い）や自分偶像礼拝に逃げ、独りよがりの自分の義を行なっていきます。それは神が求める義ではないので、真の神の力は働かず、重荷を降ろすことができず、なぜ！？という疑問がたくさん生まれてくるのです。真の神は、その疑問の全てに答えてくださいます。真の神からのラブレターである聖書には、どうやって天地ができたか、病気の原因、癒され方、なぜ事故や災害にあったのか、あなたをとりまくたくさんの問題の解決方法なども書かれています。また、求めたら惜しみなく与えてくださると約束されています。

神は愛です。あなたがどうしたら心身共に幸せな一生を全うし、天国に入れるかは、あなたを造った神が一番よくご存知です。この最も大事な教えを知らずにいることは、あなたの人生において最大の損失です。

先祖代々に渡って、私たち日本人は仏教の教えをまことしやかに信じ込まれ、まるで、クモの糸でぐるぐる巻きにされている状態でした。特に（女性達、嫁は）日々の先祖供養と称する悪習に、また年ごとの仏教行事に縛られ、心身を病んでいる人がどれほど多いことでしょう。更年期障害もその一つです。

どうして真面目に供養してきたのに、先祖(仏様)の守りもなく、家庭に不和が起こり、家族が不幸にみまわれ、心身がそんな状態になるのでしょうか。不思議に思ったことはありませんか?

ガラテヤ人への手紙4章8節

【神を知らなかつた当時、あなたがたは本来神ならぬ神々の奴隸になつてゐた。】

その日本人を、今こそ、真の神が救おうとされています。あなたの意思を真の神に向けるだけで良いのです!

ますます日本は、何が起きるか分からぬところにきています。ぜひ、以下の祈りの言葉を声に出して続けて読み、唯一・真の神の守りの中に入つてください。

救いを受ける祈り

『愛する天のお父様、イエス様。私がこれまで犯してきた全ての罪をお許しください。イエス様が、私の罪のために十字架にかかる下さり、三日目に神が死人の中からイエス様をよみがえらせたことを信じます。イエス様、どうぞ私の中に入つて下さい。そして、私のこれから的人生を導いて下さい。イエス様の御名前によつて感謝して祈ります。アーメン』

今まで信じてきた宗教、神々からの解放の祈り

『愛する天のお父様、イエス様。私が今まで犯してきたオカルト・宗教の罪をお許し下さい。今まで信じてきたこと、教えられてきたことは、すべて間違ひだったと認め、たつた今

捨て去ります。イエス様の十字架の血によつて、私をきよめて下さい。罪が許されたことを感謝し、イエス様の御名前によつて祈ります。アーメン』

真の神と聖書に対する理解力が与えられる聖靈のバプテスマを受ける祈り

『愛する天のお父様、イエス様。私に聖靈と火によつてバプテスマ(洗禮)^{せんれい}を授けて下さい。私の全身を聖靈で満たして下さい。たつた今、聖靈をいただけたと信じます。そして異言^{いげん}も下さい。頂いたと信じ、舌を動かします。ララララ……(行い=信仰で語り始める異言です。まずは、ララララ…と声に出して舌を動かして下さい。そして頂いたと信じて下さい。その後、聖靈により超自然に舌が動き始めるのを、必ず体験する時がきます。)

イエス様、ありがとうございます。これからは、あなたがおっしゃる通り、しるしと奇跡を行い、信じる者に伴う新しい言葉である異言を語ります。全ての栄光はイエス様に帰して、感謝して祈ります。アーメン』

今日から、あなたは新生クリスチヤンです。今まで何の疑いもなく、考えたことさえなかつた事に対して、新しい目で、心で、この世界を見て下さい。

佛教をはじめとした様々な宗教(⇒宗教の悪靈)、今まで信じてきた偽りの神々の呪縛から、完全に解放され、真の神であるイエス・キリストにあって30倍、60倍、100倍の祝福があなたに注がれるように祈っています。

<おわりに>

私たちぶどうの木は、2009年に、冊子「日本人はだまされている」を作成しました。あれから10年が経ち、この国の宗教、特に仏教の成り立ちについて様々な研究がなされ、私たちはインターネットを通してその情報を得ることが可能になりました。たくさんの興味深い話がありましたので、記しておきます。

私たち日本人は、1549年に、フランシスコ・ザビエルによってキリスト教(カトリック)が伝えられたと学んできました。しかし、ザビエルよりもさらに遡る事、およそ1300年以上も前の西暦199年には、すでにイエス・キリストの直弟子が伝えた原始キリスト教がインドから中国を通り、日本に入って来ていたという研究結果があります。

明確な史実としては、さらに数百年後の635年(大化の革新の約10年前)に、「景教」(景は光輝く意)と呼ばれるようになったネトリウス派(古代キリスト教の教派の一つ)のキリスト教が、初めて中国(唐の時代)に入りました。そして、803年には、日本から来た最澄と空海が景教を学び、洗礼を受け、最澄は旧約聖書を、空海は新約聖書を日本に持ち帰りました。最澄は天台宗を創建し、空海は真言宗を創建しましたが、釈迦が説いた原始佛教とは似ても似つかぬ教で、「景教と混合した佛教」でした。浄土真宗本願寺派の本山である西本願寺には、景教の聖書の一部(マタイによる福音書の「山上の垂訓」を中心とした部分)の漢訳である『世尊布施論』が所蔵されており、この事実をもって、親鸞も景教に学んだとする説もあり

ます。中国に入ったキリスト教徒⇒景教徒たちは、日本にも渡り住み、景教は日本の皇室や佛教界、さらには庶民の間にも広まっていきました。景教、つまりキリスト教は、今の日本の神道、佛教の土台となり、日本人の文化や風習に多大な影響を及ぼしたのです。

例えば、平安時代(794年～1185年)にできた「いろは歌」。「いろはにはへとちりぬるを」で始まる「いろは歌」は、「折句」であって、そこには、イエス・キリストに関するメッセージが折り込まれているという話があります。「折句」というのは、そのままの文章の意味のほかに、もう一つ別のメッセージを折り込むことを言います。いろは歌は昔から、七文字ずつ区切られ、次のように記されます。

いろはにはへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせ　す

この各行一番右側の文字を上から下へ読むと、「とかなくてしす」になり、それはつまり「咎^{とが}なくて死す」=「罪がなくて死んだ」という意味になります。(歌の中では清音と濁音は区別されない)また、一番左側の文字を上から下へ読むと、「いちよらやあゑ」になり、これはおそらくヘブル語の「イーシ・エル・ヤハウエ」=「神ヤハウエの人」という意味になるそうです。イーシは人、

エルは神、ヤハウエは神の御名、すなわちイエス・キリストです。「いろは歌」には、「神ヤハウエの人であるイエス・キリストが、咎なくて死なれた」というもう一つのメッセージが折り込まれていたという事です。さらに、左上、左下、右下の三文字を読むと、「いゑす」=「イエス」になります。偶然にしては出来すぎです。

いろは歌の「うゐのおくやま」の部分は、「有為の奥山」と仏教界では読んでいますが、「憂ゐの奥山」だという学者もいるそうです。そうすると「いろは歌」は、

色は匂えど散りぬるを
我が世誰ぞ常ならむ
憂ゐの奥山今日越えて
浅き夢見じ醉ひもせず

となり、聖書に書かれている【人はみな草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。】(イザヤ書40章6節)、【わたしの目をほかにむけて、むなしいものを見させず、あなたの道をもって、わたしを生かしてください。】(詩篇119篇37節) という内容を歌ったのではないかとも言われています。

そして、作者は俗説では弘法大師・空海と言われていますが、多くの学者はこれを否定し、一般的には作者不詳になっていますが、おそらく景教徒⇒キリスト教徒ではないかとも言われているそうです。

さらに、^{いなり}稲荷(INARI)の語源は、ラテン語の「IESUS NAZARENUS REX IUDAeorum」の頭文

字をとって、「INARI」という見解があり、これは、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」という意味になるそうです。つまり、日本で数が多い稻荷神社(約3万社)は、実はイエス・キリストを祀っており、日本は稻荷神社がつくられた頃(711年)からキリスト教が国の中にあったのではないかという説です。稻荷神社を日本にもたらしたのは、シルクロードを渡ってきた渡来人の秦氏^{はたうじ}であり、彼らは日本の統一、^{やまとちょうてい}大和朝廷設立をひそかに策動し活躍した一族として知られています。しかし、その正体は古代イスラエルの失われた10支族の一部族の末裔であり、彼らはネトリウス派の原始キリスト教徒であるとも言われているそうです。

フランシスコ・ザビエルによる西洋まわり(海路)のキリスト教が来るよりずっと以前に、実は、景教という東洋づたい(陸路)のキリスト教が日本に来ており、キリスト教は、日本史のきわめて初期から、日本史の形成に深く関わってきたのです。しかし、今の日本には、昔ながらのキリスト教は見られません。見られるのは、西洋まわりで入って来たカトリックやプロテスタントと呼ばれるキリスト教です。

《注：イエス・キリストから直接教えを受けた弟子たち、また、イエス・キリストが私たち人間の罪のために十字架にかかるて死に、3日目に復活して天に帰られた(AD31年)後に、教えを全世界に宣べ伝えた使徒パウロによって、原始キリスト教(=純粋な教え)が日本にまで広がり、初代教会がつくられていきました。しかし、パウロ亡き後、初代教会は富と権力をかしらとして墮落しました。そして、聖書から完全に離れて、お金で

罪の許しを得られる免罪符を発行したり、イエス・キリストの母親とされたマリヤを神格化したカトリックが生まれたのです。カトリックは人間を教皇として立て、様々な神々（女神）を偶像崇拜していたローマ文明を取り入れ同化させ、偶像を崇拜していた人々に受け入れられるようにしてその勢力を拡大していました。そんなカトリックの教えに抵抗し、もう一度聖書のみに立ち返った人々によってできたのがプロテスタント（英語で新教徒の意味。教皇に反抗して聖書に立ち返る信徒）でした。しかし、それも今の時代では聖書の教えに完全に従っている国・人々はほとんどおらず堕落しました。そして、天の父（神）のみことば（聖書）ではなくローマ教皇の教えを、人間的ピラミッドの頂点にして活動しているカトリックに再び統合されているのが、現代のプロテstantの現状です。（ローマ教皇による世界統一宗教の働き）

カトリックとプロテstantは、同じ言葉（聖書用語）を使いますが、同じ教え、同じ信仰ではありません。』

ポルトガルのカトリック・イエズス会の宣教師であるフランシスコ・ザビエル（スペイン人）によって伝えられたキリスト教によって、16世紀当時、日本には70万人の信者がいました。しかし、ザビエルは、布教と共に日本に貿易を持ちかけてきました。その前には、ポルトガル人が鉄砲を伝えました。また、布教と言いながら、日本を植民地にしようとしていたというイエズス会の野望話がありました。（現在のローマ教皇フランシスコは、史上初のイエズス会出身の教皇です。）国を乗っ取れることを恐れた豊臣秀吉はキリスト教を弾圧し、徳川家康は禁教令を出し、鎖国をしました。しかし、その状況下でも、プロ

テstantのオランダとだけは、1641年～1859年まで長崎県の出島で貿易を続けました。この際、「カトリックには気をつけろ」と、オランダの宣教師に教えられたという話もあります。1871年（明治11年）には、日本最古のプロテstantの神学校が出島に建てされました。

明治維新の時にも、聖書を入れてきたら欧米諸国に支配される危険があると考えた日本は、国家神道を作り上げ、聖書の神になぞらえて天皇を国の象徴として奉りました。とは言え前述した通り、この神道、皇室の土台にはすでに1000年以上も前にイエス・キリストの教えが入ってきています。

今日、日本は「独自の神道の国」、「仏教国」とみなされてはいますが、実際は何もよく分からずに自身を「無宗教、無神論者」と言う日本人も多いです。

日本の鎖国時代とは、キリスト教から日本人を離した政策だったのでしょうか。いいえ、偽りの教え（カトリック）が入ってこないように、真の神が日本を守って下さったのだと言えるのかもしれません。かつて日本の神道、仏教は、確実にイエス・キリストの土台の上に教えを建て上げていきました。しかし、土台・始まりにイエス・キリストの教えがあっても、その後どのようなものを建て上げていったのか、どのような信仰で伝えていったのかで、似て非なるものになります。聖なる神とはかけ離れた不純物、人間の考え、人間的な情欲などが一つでも混入すれば、全く違うものに変化してしまうのです。原始キリスト教が、カトリックが立てた人間・教皇（法皇）により、聖書真理から離されたようです。

今こそ日本人は、西暦199年に、原始キリスト教を、続く景教を純粹に信じた私たちの祖先がいたように、何の混じり気もない純粹な教え・真実の神の教え・福音(グッドニュース)にもう一度立ち返らなければなりません。

すべての名にまさる名は、イエス・キリストただお一人です。この方を自分の主(神)だと告白し、愛し、従う、神に召された者たちが、この日本にまだまだいると信じます。2000年前の最初のイエス・キリストの教え、真の神がいる事、神は愛であるという事を、この時代を生きる日本人に伝えたい!その思いで、私たちはこの冊子を作りました。

これは、万物の創造主である父なる神と、その神が、2000年前に人類に遣わした御子なる神イエス・キリストからの呼びかけです。何ものにも代えられない神の偉大な愛と、真実の神の教えが、読んで下さった皆様に届く事を祈ります。

聖書に何が書かれているのか(文中に度々出てきた悪魔の策略、悪霊についてなど)をもっと知りたい方は、ぜひ「未来へのプレゼント」「日本人は神への知識がないために滅ぼされる!!」「あなたを苦しめているのは誰?」(ぶどうの木発行)をご一読ください。

ピリピ人への手紙2章6節～11節

【キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様^{ありさま}は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き

上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。】

アーメン。

「ぶどうの木」発行

2019.4.1

私たちの教会名「ぶどうの木」とは、聖書ヨハネによる福音書15章よりいただきました。

『わたし（イエス様）はまことのぶどうの木、わたしの父（神）は農夫である。わたしにつながっている枝（クリスチャン）で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。あなたがたは、わたしが語った言葉によってすでにきよくされている。わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。……あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉（聖書）があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。……あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。これらのことを行なうのは、あなたがたが互に愛し合うためである。』

イエス様としっかりとつながっていれば、必ずこのみことばが自分の上に成就していきます。私たちは、聖書エゼキエル書第34章の預言により集められ、聖書のすべてのみことばを愛し、信じ、実践している、クリスチャンです。